

<今日の説教のポイント コリントの信徒への手紙 I 12 章 12～31a 節>
教会とは何かが、聖書の中で最も熱く、魅力的に語られている所。

1 (12-13) 教会を教会と言わず、キリストと言っているパウロ！

今日の箇所は、「神は、教会の中にいろいろな人をお立てになりました」(28)とあるように、パウロが教会について語っている箇所です。その出だいで、「体は一つでも、多くの部分から成り、体のすべての部分の数は多くても、体は一つであるように、キリストの場合も同様である」(12)と、パウロは思わず(かどうか)、教会のことをキリストと言っています。今日の箇所は、教会を「体」に例えて考えている点に目が奪われやすいのですが、それではこの地上の人間の体で教会を考えるに止めかねません。教会がキリストであるなら、教会は地上の体を超えた、神の「望みのままに」(18)立てられた魅力を備えている点まで、この箇所から読み取れるし、読み取っていいことを指摘しておきたいと思います。

2 (14-31a) 教会の魅力は神様が起こされ、与えて下さることにある！

二千年前に生きたパウロですが、今、現代科学の発見によって言われているような私たちの体の全体と部分が持つ関係について述べつつ、主の教会もまたそうなのだ、と熱く語りかけて来ます。教会全体とその部分である信徒一人一人(の賜物 12:1-11)との関係です。皆(信徒)がそれぞれの働きをなし、それが集まって一つの体(教会)なのだ、と繰り返し語られるのを聞いて、私たちは主の教会が理解できてきます。しかしここで、「皆一つの体となるために洗礼を受け、皆一つの霊をのませてもらったのです」(13)に、1で指摘した、教会が私たちの体が持つ素晴らしさを超えた内容を持っている理由が示されていることを見逃してはなりません。「望みのままに」(18)なされる神様の御旨に応えた(洗礼を受けた)者たちから成る教会に神様が起こされる「一つ」です！ 主の十字架の死によって自分の罪が赦されたことを知る者たちが集って建てる教会の「一つ」です。しかもそれは、自分に与えられた賜物に何とか人と違う価値を見出そうとするようなことに私たちを留まらせません。神様が皆に与えると約束された、「もっと大きな賜物を受けるよう熱心に努めなさい」(31)と言われているのです。その「もっと大きな賜物」こそ、次の13章でさらに熱く語られている「愛」なのです。